夏目漱石集

書庫

日本現代文學全集・講談社版 23

夏目漱石集

(一)

日本現代文學全集

23

夏目漱石集(一)

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和36年3月13日　印刷
昭和36年3月18日　發行

定價　450圓

© KŌDANSHA 1961

著者　夏目漱石（なつめそうせき）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衛

發行所　株式會社 講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話大塚大代表(941) 3111
振替東京3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　大製株式會社
製函　株式會社岡山紙器所／株式會社第一紙藝社
背革　小林榮商事株式會社
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします

日本現代文學全集

目次

漱石文學と僕……渡邊一夫
倫敦塔の前で……小島信夫
早稲田南町の頃……石垣綾子
漱石と英文學……福原麟太郎
父の思い出……夏目純一

題字・谷崎潤一郎

講談社月報 6
1961・3

東京都文京区音羽町3の19

漱石文學と僕

渡邊一夫

小學五六年生ぐらゐの頃、竹久夢二の繪や有本芳水の詩あたりから、何とはなしに文學的なものにあこがれてしまつた僕は、中學生になりますと、文藝書の濫讀をし始めてゐました。何をどういふ風に讀んだものか、一種の驚きと恥かしさとを以つて、自らを省みます。

その當時の僕の讀書について關心を示してゐた亡母は、作家の選擇について様々な忠告を與へてくれましたが、その檢閲をフリーパスしたのは、夏目漱石だけでした。ふしぎなことに、森鷗外も幸田露伴も、その頃の僕の興味を惹かず、亡母にも推薦されてゐませんでした。今更勝手な註文になりますが、亡母が、文學少年の僕に、鷗外や露伴をも讀めと勸めてゐてくれたら、夢二・芳水によつて文學少年になつた僕は、やゝましな文學青年に進化してゐたかもしれません。

亡母が、漱石をフリーパスにしたについては、「漱石は大學の先生をしてゐた」とか、「博士號を辭退した」とか、いふことが、大いに與つて力があつたやうに邪推してゐます。そして、亡母は、「大學の先生をしてゐた」漱石に、學識とか品格とかいふものを感じ取り、「博士號を辭退した」漱石に、反俗的な精神や生眞面目さを見出してゐたらしく思はれます。かうした亡母の解釋の是非は、檢討に値しますが、この際、問題にいたしますまい。

とも角も、漱石だけは、フリーパスでしたから、少年の僕は、その作品を次々と讀んだやうです。但し、文藝評論めいたものは、文學青年の末期になつて甫めて通讀し得た程度ですから、文學少年の僕には、ちんぷんかんでした。

少年の僕の心を特に捕へたのは、『吾輩は猫である』『坊つちやん』『二百十日』『心』『須永の話』『三四郎』などでした。

『吾輩は猫である』は、何度讀んだか判りませんが、たゞひたすら滑稽で痛快で面白かつたやうに思ひます。文學青年を經て文學中年頃になつた頃の僕でも、この作品に、前とは別な面白さを感じましたけれども、何となく暗い虚無的なところや、とげ〳〵しさをも感じたことを覺えてゐます。『坊つちやん』と『二百十日』とは、今讀んでも、あの齒切れのよい文章と、さくつとした人物とは、あまりさくつとしてゐない生活をしてゐるかもしれない僕には、やゝ子供ぽく思はれる點があるとしても、恐らく快いでせう。『吾輩は猫である』のやうに、「大學の先生」らしい學識のかけらを鏤めずに、簡單な物語に、「博士號を辭退した」人に ふさはしい小氣味よいたんかを交へたこの二つの作品は、人間らしい人間＝文學者といふ考へを少年の僕に與へてくれた最初のものでした。『坊つちやん』の

最後の一行、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」といふ文章は、今でも記憶してゐるくらゐです。大袈裟に言へば、フロベールの『エロディヤス』の有名な結びの一行以上に、この『坊つちやん』の結びの句は、少年の僕を撃ち、その餘音は、停年教師直前の僕の心にまで響いてきてゐます。

『心』『須永の話』『三四郎』などは、少年の僕にとつて、半分判るやうで判らない大人の世界、特に男女の戀愛が出沒する世界のものでしたが、奇妙なことに、僕は、これらの小説で、戀愛といふものが、人間の世のなかでは、非常に重大な役割を演じてゐることを教へられたやうです。漱石以外の作家の、かなりあくどい戀愛小說（現在のセクス・マニヤ的小說より、はるかに「上品な」）を既に讀んでゐた僕が、このやうな奇妙な「開眼」（？）を受けた理由は、はつきり判りませんが、もしかしたら、漱石が露骨な愛慾描寫を嫌ひ、つまり「上品に」、戀愛を一生の一局面として、人間心理の場で取扱つてゐた結果かもしれません。

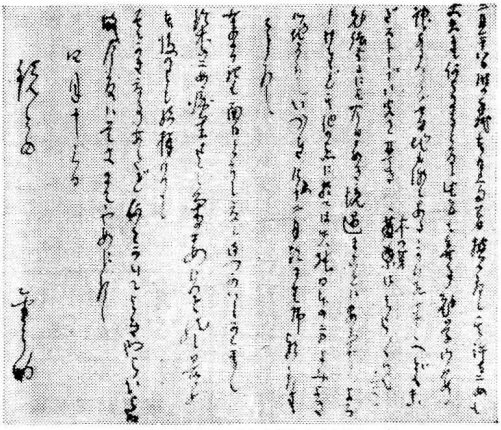
『門』『それから』『道草』などは、少年の僕には退屈な作品でしたし、『虞美人草』は、「藤尾」の嬌笑に惹かれ、「宗近さん」（『坊つちやん』的『二百十日』的な）のきつぱりした進退に心を撃たれた外は、何か騒々しい感じがしました。そして、『草枕』は、名文らしいことは判つても、何かぼうと霧に包まれてゐるやうな感じで、少年の僕には、一向に面白くありませんでした。『明暗』の頃には、僕は文學青年になり、專ら、谷崎・芥川・菊池・久米などの作家に傾倒してゐました。

漱石は、その日記のなかで、モーパッサンの『眞珠の首飾』を評して、「殘虐な作品」としてゐますが、文學青年の僕には、その意味が判らず、やうやく、文學中年になつて判つたやうな氣がします。このやうな僕は、漱石について語る資格は全くないまゝに、今や文學老年の花盛りを惜しんでゐます。このところ、しばらく漱石の作品は讀んでゐません。餘暇を見て、少年青年時代に讀んだものを讀み返して、僕自身の「進歩」と「退歩」とを、ともくに見定めることにいたしませう。（février 1961）（東大教授・佛文學者）

倫敦塔の前で

小島信夫

昭和三十二年の四月に私も倫敦塔へ見物に行つた。ロンドンのビクトリア・ホテルというところに泊つていたが、朝ビクトリア停車場へ入つてくる汽車の音をききながら目をさまして、窓から外を見ると、オーバーを着てコウモリ傘をもつた人々が歩きはじめていた。木の芽ももえだしていたが、まだまだ寒かつた。倫敦塔へ行く途中ずつとショボショボ雨が降つていて、アメリカからやつてきた私は、途中の古い建物がなじめない。二百年以上古い歴史がのこつているところが、不潔で氣味わるく思えた。ある人はアメリカからパリへやつてきて、ガイコツの街のようだ、といつたが、



漱石が英國留學中　鏡子夫人に宛てた手紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私にもいつも新しい自然だけがなじめて、あとの古いものはイヤになつていたようだ。

倫敦塔では私はそそくさと見てまわり、いつまでも、昔をのこしている石の建物を恨みながら、塔の前の喫茶店へ入つて、身體をあたためるつもりで、紅茶をのんだ。大きなポットにいつぱいもつてきたので、とてものみきれなかつた。私はそれから眼をとじて「倫敦塔」を書いた漱石のことを考えていたら、久しく忘れていた日本語がうかんできた。長い間私はなるべく日本語で物を考えまいとしてきたが、もうあとパリへ行つて十日たたぬうちに日本へ歸ることを思うと、漱石の、あの、塔へ焦點をしぼつて行く書き出しの文章が思いだされてきた。漱石は地圖を頼りに人に道をききききしてやつてきたといい、その道順もおぼえていない、というふうに、過去のこの塔の存在感の方を高めようとしている。それから塔を去つて下宿へもどつた時に我に返つたといつたふうに書いている。私は、そのときふと、エドガー・アラン・ポウの「アッシャー家の崩壞」に似ていると思つた。若者がアッシャー家の城へ馬にのつてたずねて行く文章の調子と何か似ているようなかんじになつた。それから私はうとうととしばらくそのまま眠つた。眼をあけるといかにも主婦ふうな女が子供をつれて前の席へやつてきた。その前日、家族の者に洋服の布地を買うために、ある有名なデパートへ行つた時に、ベンチに腰をかけてじつとしている主婦が數人いた。そういうおちついたかんじの主婦は、アメリカでは見たことがなかつた。それからそのデパートの歸りに地下鐵へ入つて行つたとき、ひとりの男が持物をおとすと、私の前を行く二十四、五の美しい女性が、さつと拾つて小走りに走つてその男に渡していた。それから私は、漱石の「門」のことを考えだした。

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と宗助がたずねると、細君の御米が隣りの部屋から長い物尺で「こうでしよう」といつて教える件りである。その前に御米は「近江のおうの字じやなくつて」というのだが、宗助は、その近の字が分らないんで困つている、というようなことをいうのである。細君の御米は笑いもせず、教えている。たしか、そのあと宗助は風呂へ出かけて行く。

「門」は、私は十八、九の時に讀んだが、その前に漱石のものはあまり讀んでいなかつた。私は少年として、この御米と、「お」をつけた名前と、この宗助とのひつそりとした生活が胸にくいこんできて、こんな生活がしてみたいと思つた。その後もいくつかの作品を必要があつて讀み、私なりに面白かつたが、この御米のことを思うと胸がうずいてならなかつた。その御米が今、眼の前のイギリスふうの顏をした婦人を見ているうちにうかんできた。

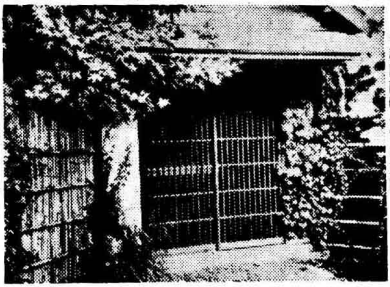
過去に傷をもつた同志のこの二人はその後も幸せになりきれず、宗助は禪門をたたかなければならない。私の好みかも知れないが、何か傷がなければ女は美しく見えない。そのくせ、何かのときに互いに傷をあばきあつて泥沼におちこんだりするのであろう。この二人にはおびえる者が外にある。御米を奪われた先夫である。このようなものが外になくて、夫婦の二人の中にあるとしたら、なかなか、こうは行くまい。私はそんなふうなことを、日本語で物を考えだした勢いで色々と考えながら、茶をのみつづけたが、ポットは大きくて、結局のみきれなかつた。

（作家）

早稲田南町の頃

石垣綾子

早稲田南町の漱石山房は、私の育つた早稲田の家から數軒さきの近さであつた。漱石は近所を散歩しながら、偶然に目をとめた門の表札に、私の父の三四郎という珍らしい名前を發見し、「三四郎」


早稲田南町の家の玄關

の題名を思いついたということである。子供のころ私は漱石のお宅の前を毎日のように通つた。板ベイをまわしたふるびた木の門がまえで、地味な少し暗い感じであつた。

近所のよしみで、漱石の長女の筆子さんは姉の遊び仲間であつた。「猫のお墓」に命日のおまいりをするというので、姉は出かけていつたが、私はのろまで愚圖扱いにされていたから、仲間に入れてもらえず、おいてきぼりを食わされた。早稲田小學校では五年になるまで、三女の榮子さんと同級生であつた。色白のおつとりした小柄なお嬢さんで、教室ではいつも前方に席があり、後の方にいる私とは離れていたので、仲よしにはならなかつた。彼女は大きなリボンを髪に結び、きれいな着物に包まれ、行儀がよくおとなしかつた。

漱石が持病の胃潰瘍であつたころ、つきそつていた看護婦が、偶然にも、私の母が病氣のときに、私宅に派出されてきた。家の近くにあつた看護婦會のひとで、多分、漱石のお宅でも、看護婦をそこに頼んだのであろう。色白のぽつちやりと肥つた若い看護婦は、母の枕もとで、こんな話をした。

「漱石先生はとても氣むずかしやでいらつしやいますので、氣のきかない私はよく叱られました。泣かされたことも度々ございました」

胃潰瘍という病氣はそれほど苦しいものなのであろうが、その時、私は、榮子さんのお父さんはとてもこわいひとなのだと思つた。

漱石は學校友だちの父親として、また近所に住むお宅の主人公として、私はその名前をいつも耳にしたのであつた。私の弟も、夏目純一さんや伸六さんと一緒に遊んだようである。

漱石の作品に初めてふれたのは、小學校五年生のときであつた。私たちの受持ち教師は文學青年で、漱石の愛讀者であつたにちがいない。ちようどその頃、朝日新聞に「硝子戸の中」が連載されていた。先生は毎朝、その新聞を手にして教室に入ると、私たちの前で讀んで聞かせた。先生はときどき讀むのをやめて、その描寫のうまさや、生とか死とかの問題について、感想をのべながら説明してくれたけれども、子供の私にわかるはずはなかつた。

しかし私はこの文學青年の先生に、子どもらしい憧れをよせ、ひそかに慕つていたから、その口許をじつとみつめて聞き入つた。「硝子戸の中」に出てくる高田の馬場や、堀部安兵衞のことや、近所の喜久井町は身近かに知つていたのでわかつたような氣持になることもあつた。

漱石の作品に近づいたのはこのようなきつかけであつたが、實際を云えば漱石の存在が偉大なものとして理解したのではなかつた。

女學校の下級生のころ、姉が「吾輩は猫である」を面白そうに讀んでいたので、私もこの本を手にした。猫のお墓のことがあるので、身ぢかさから入つていつたのである。

大正十二年の二十歳ごろになつて、人生とは何であるかを思い悩むようになると、手あたり次第に本をよみはじめた。漱石の作品は若い人が誰れでも讀むように、私もつぎつぎに觸れていつた。ふしぎなことに、圖外のものはほとんど讀まなかつた。何となくその世界はかけ離れていたが、漱石のものは正義感があるような、人生的な魅力をもつていた。どんな作品にいちばんひきつけられたか、それは思い出せないのであるから、漠然と讀んで、漠然と感じたというまでのことであつた。

そのうちに私の心にふしぎな作用がおこつて、一時ほど熱心によむ氣になれなくなつた。漱石の諦觀というようなものが、氣になつ

て、若さにたける私の心情とちぐはぐな思いをさせられた。何だか納得がいかなくなつた。あとから考えると、「心」のような理念的な一連の作品に、ついてゆけなかつたのであつた。

漱石文學の味わいは、讀者である私の方が、精神的に成熟しなければ、つかみ得ないことなのであつた。

一介の讀者であるにすぎない私は、偶然に近くに住居があつて、その關係から漱石の作品にふれていつたという足どりであつた。漱石山房のあつた早稲田南町は、無慘にも今は變りはてて、私はあの邊りに立つのが、辛らいような氣持がしている。

（評論家）

漱石と英文學

福原麟太郎

森田草平氏が存生のころ、夏目先生は毎月どのくらい本代を拂つていられたでしよう、と訊ねたことがある。森田さんは、あるいは他のお弟子のどなたにしても、知つていられなかつたらしく、なあに先生は貧乏だから、いくらも買やあしないさ、田部君（と言われたように思う。そうだとすれば田部重治氏である）のところにある本ほどは持つていなかつたね、と答えられた。

そういうことを知りたい。私の持つている漱石全集大正十四年版別冊の漱石山房藏書目錄にある洋書の多くは英國で買われたものかとも思う。そのころまでの年代のものが多いからだが、雜誌は殆ど歸朝後のものである。やはり丸善から取られたろうと思うが、上田敏先生のように、亡くなられると莫大な借りになつて居り、丸善も弔意を表して棒引きにしたというのだが、漱石は沒年（上田敏と同年）ころには非常な金持ちであつたろうから、そんな心配はいらなかつたであろう。

藏書目錄を一頁一頁丹念に見てゆくと、實に面白い。いろいろな思が浮ぶ。ブランデスの「十九世紀文學主潮史」四卷というのは當時流行した本であつた。アリストテレスの「詩論」を漱石はブッチャーの譯で讀んだようだ。當時はバイウォーターのと二つ並んで行なわれていた。「リラ・ニコチアナ」という本がある。タバコに關する詩華集である。ノルドーの「頽廢」（一八九八）という本がある。これは、厨川白村が「近代文學十講」で利用したといわれているものだが、世紀末文學の解明になる本で、大正の始頃、私たちは競つて讀んだ。ポスネットやロリエの比較文學の本もなつかしい。シモンズの「文學における象徴主義運動」という本はそのころの花々しい文學書で、岩野泡鳴の譯では「表象派運動」となつて居り、河上徹太郎氏のごときはこの難解な譯本から新文學の精神を汲みとつたと言つている。ワースフォールドの「批評の原理」という本（一八九七）は私の先生で、漱石よりも二年後れて留學し、ロンドンへつくや漱石の神經衰弱のことを知つて文部省へ告げ口をしたと噂される岡倉由三郎（このことの眞偽はどうしてもわからない。先生は私には噂と反對のことを語られた）の書庫にもあり、私も眞似をして買つて持つているが、今は誰も讀まない良書である。

明治三十八年　東京帝大英文科講師時代の漱石（中列右から二人目）左から二人目は上田敏

以上が文學一般書で、次は英文學の作者別に書目が並んでいる。まずエインズワスの「ロンドン塔」これが漱石のロンドン塔の種本の一つであろう。漱石は「文學論」の中でヂェイン・オースティンを非常にほめている。(中野好夫氏のオースティン譯「自負と偏見」は、それほどまでに漱石のほめるオースティンをそれに値するように譯してみようとした名譯である)そのオースティンは四冊あつて(それが當時市場にあつた全部かも知れない。それだけが女史存生中の出版で死後二冊加わつた)いずれもマクミラン挿畫入り標準版と稱する叢書版でそろえてある。「自負と偏見」「分別と多感」「エムマ」「マンスフィールド・パーク」である。ボズウェルの「ヂョンソン傳」は、英文學自慢の名著だが、漱石は二種持つていて、一つは一八三五年版の七冊本(一、二、六巻缺)、もう一つは一八五一年版の四冊本である。ヂョンソンのことを漱石がどう考えていたか、研究してみたい。ブロンテ姉妹の小説は四冊、そのうちに「嵐ケ丘」がある。ブラウニングの詩集が三種四冊あるが、私の想像では「三四郎」とブラウニングの「男たち女たち」と關係がある。これをいまに明らかにしたいと思つている。私の野心である。バイロンの本が七種十一冊あり、そのうち佛譯が四冊、「チャイルド・ハロルド巡禮」が四冊あるのはどういうことであろうか。漱石はバイロン特に「チャイルド・ハロルド」が好きであつたのか。バイロンと同じように調べてみたいのはディ・クウィンジーの十五巻全集のある由來である。漱石はディ・クウィンジーが好きであつたのか。そのほかにも四種のディ・クウィンジーがある。

そのDのところには

Dixon (J. M). A Comparison between Elizabethan and Victorian Poetry. Tokyo: kókumin-Eigakujukwai. 1891

—— . Simpler English Poems. Tokyo : Hakubunsha 1890

という二冊がある。このディクソンという人は、漱石の東京大學時代の先生で、先述私の師匠の岡倉由三郎もこのディクソンの弟子であつた。これはディクソン先生の本だと思つて書棚の中を漱石は眺めていたろうと思うと何だかなつかしい。

それからEのところへゆくとヂョーヂ・エリオットの小説が十種十三冊ある。漱石は詩も讀んだらしいが、それ以上に小説讀みであつたに相違ない。Fのところにはフィールディングの三大作がそろつて居り、Gのところにはギッシングが四冊、ゴウルドスミスの小説や詩が六種ある。Hのところでハーディが四冊ある。漱石がハーディを讀んでいてもおかしくはない。同時代人なのである。

(英文學者)

父の思い出

夏目純一

父親というものは、子供にとつて大概怖いものらしい。私の場合も、時々一緒に遊んで貰つた記憶も無いことはないが、やはり父は親しみにくかつた。

私が曉星小學校の一年の頃、學校から歸ると、父がフランス語を教えてやるから來いと言う。ところが、書齋へ行つて五分も經たないうちに、馬鹿野郎と一喝されて戻つてくる。つまり父の忍耐力の限度が最高五分という譯で、早い時は一分ともたなかつた。何しろこつちは小學生だから、英語だつたらABCなんて言つてる時分だし、遊びたいし、最初から習おうなんて氣がないのに仕方なしに顔を出す。それを呑込みが遲いといつて怒るんだから、土臺無理な話だと思う。母の話によると、父の所に英語を習いに來ていた生徒を怒り通しなので、隣りの部屋で聞いていられなくなり、どうしてそう怒つてばかりいるのかときいたら、出來ないからだという、出來

ないからこそ教わりに來るんでしようと母が言うと、俺は出來ない奴は蛇蝎の如く嫌うんだと斷言したという。たゞがみ〳〵怒るより、賞めたりおだてたりしないと教育など出來るものじやないが、父には教えたいという意識が强すぎて、出來ないのがじれつたくなつてくるらしい。とにかく毎日どなりつけられて歸つてくるのが日課だつた。

しかしそういう意識のない時には、父にも非常に愉快な面があつた。例えば私が學校で覺えたてのフランス語の歌など歌うと、父はその文句が面白いと言つて笑う。こつちは意味もわからないまゝいい氣になつて聲を張り上げる。相撲をとつたこともあつたが、何でもいいから倒してしまおうと足にかじりつく。そういう時の父はとても親しみがあつて、家族との團欒も結構樂しんでいたようだ。殊に私のすぐ上の、愛子という姉など言いたい事を言つて、父も機嫌よく面白がつていたらしい。普通、仕事中に子供が騷いだりすると怒るらしいが、父の場合はまるつきり無關係で、私たちが書齋の周圍の廻り廊下で駈けつこをして騷いでいても、平氣で讀んだり書いたりしていた。そういう所は、たゞ氣難かしいというだけではなかつたように思う。いつだつたか、射的屋に連れて行かれた。その頃、鐵砲を買つてくれと騷いでいたからだと思うが、そこで、動いてる軍艦を撃つてみろと言われた。周圍に大ぜい人がいるので私は怖氣づいて尻ごみした。すると父は、弟に撃てという。ところが弟も眞似をして嫌だと言つたので、父は怒つていきなり弟をステッキでなぐりつけた。その時のことは相當强いショックで、それ以來、父が一緒に出かけようなどというと、私達は戰々兢々、嬉しいどころではなく、しぶ〳〵義務みたいについて行つた。或日、洋食屋へ行こうという。飯田橋から九段下へ通ずる電車通りの中ほどにあつた、かなり有名な店だつたが、食事中も父は、やれ坐り方が惡い、よそ見をするな、音をさせて食べるんじやないなどと、文句のいゝ通しでおち〳〵食べていられない。料理がちつともうまくない。今考えてみれば、大事なことをちやんと注意してくれてたわけだが、まるで樂しくも有難くもなかつた。父自身はイギリスに居たことがある故で、服裝やエチケットにうるさかつたのだと思う。

服裝といえば、父は隨分おしやれだつたことはきいている。靴など全部木型が入つていて、その木型たるや、三つ位に分れた本格的なもので、外國で誂えても相當いい靴でないとついて來ないし、靴の半値はするという代物だ。洋服の假縫の時もうるさいことを言つていた。身のまわりのことに相當凝りやだつたのだと思う。潔癖というのか、鼻に關しても相當きびしい方だつたから、怖いことも怖かつたが、父にしてみれば、子供には小さいうちからフランス語なりドイツ語なり、みつちり仕込んでおいてやろう、鼻もきちんとしておけば將來役に立つという親心も、人一倍持つていたのかも知れない。木曜の面會日に集る人たちにも、何か言つてくれば必ず手紙を書くし、作品の批評も丁寧にするなど、色々な意味で親切だつたようで、そんな父だから門下生の人たちに大變親しまれていたと思う。（談）

（漱石令息）

漱石の墓に參詣した一族
前列右は長男純一　左は次男伸六

夏目漱石集　目次

巻頭寫眞

筆　蹟

吾輩は猫である……五
倫敦塔……二〇三
薤露行……二一三
坊つちやん……二三五
夢十夜……二七九
三四郎……二九〇
人　生……四〇一
無　題……四〇三
倫敦消息……四〇四
自轉車日記……四一五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

無　題……四二〇
長谷川君と余……四二〇
ケーベル先生……四二三
三山居士……四二六
日　記――明治三十三年九月八日より十二月十八日まで――……四二八
斷　片――明治三十四年四月頃以降――……四三四
日　記――明治四十三年八月六日より四十四年一月二十一日まで――……四四一
日　記――明治四十五年五月より大正元年十月五日まで――……四六五

作品解説……中村光夫　四七七
夏目漱石入門……江藤　淳　四八三
年　譜……四八九
參考文獻……四九九

夏目漱石集
(一)

風吹碧落淨
玉壺月上東
山玉一團
大四元年時九月
清石山人

吾輩は猫である

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニヤー〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ〳〵した感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顏を見たのが所謂人間といふものゝ見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも殘つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顏がつる〳〵して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會はした事がない。加之顏の眞中が餘りに突起して居る。そうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも咽せぽくて實に弱つた。是が人間の飮む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が惡くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るがあとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隱して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ〳〵這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向ふに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫くして泣いたら書生が又迎に來てくれるかと考へ付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も來ない。其內池の上をさら〳〵と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度くても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をしてそろり〳〵と池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸內にもぐり込んだ。緣は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偖邸へは忍び込んだものゝ是から先どうして善いか分らない。其內に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末でもう一刻も猶豫が出來なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の內に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ拋り出した。いや是は駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺

所へ這ひ上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつく〳〵いやになつた。此間おさんの三馬を偸んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出され様としたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて此宿なしの小猫がいくら出しても出しても御臺所へ上つて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ拋り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寐をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寐て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで彼は友達が來る度に何とかゝんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寐をするときは必ず其脊中に乘る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが別に構ひ手がなかつたから已を得んのである。其後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寐る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこゝのうちの小供の寐床へもぐり込んで一所にねる事である。此小供といふのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寐る。吾輩はいつでも彼等の中間に已れを容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く小供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。小供は——殊に小さい方が質がわるい——猫が來た〳〵といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て抔は物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する小供の如きに至つては言語同斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、拋り出したり、へついの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しを仕樣ものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いだら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顚へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君抔は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の樣な子猫を四疋產まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰

つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤の議論と思ふ。又隣りの三毛君抔は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大に憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰡の臍でも一番先に見付けたものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其强力を賴んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて濟して居る。白君は軍人の家に居り三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日〳〵が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮へる事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をし樣。元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほとゝぎすへ投書をしたり、新體詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、諧を習つたり、又あるときはヴイオリン抔をブー〳〵鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で諧をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張是は平の宗盛にて候を繰返して居る。皆んながそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと水彩繪具と毛筆とワツトマンといふ紙で今日から諧や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寢もしないで繪許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に下の樣な話をして居るのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人のを見ると何でもない樣だが自ら筆をとつて見ると今更の樣に六づかしく感ずる」是は主人の述懷である。成程許りのない處だ。彼の友は金緣の眼鏡越に主人の顏を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで晝がかける譯のものではない。昔し以太利の大家アンドレア、デル、サルトが言つた事がある。晝をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も畫らしい畫をかゝうと思ふならちと寫生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金緣の裏には嘲ける樣な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寢をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て吾輩の後ろで何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア、デル、サルトを極め込んで居る。吾輩は此有樣を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手初めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寢た。欠伸がしたくて堪らない。然し切角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思ふて、ぢつと辛棒して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顏のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出來ではない。脊といひ毛並といひ顏の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある樣な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯產の猫の如く黃を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黃でもなければ黑

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com